

NPO 法人 純正律音楽研究会会報 ～2026年5月発行～

ひびきジャーナル



〒106-0032 東京都港区六本木 3-16-13-1009 Tel:03-5427-9034
Fax:050-3737-8267 e-mail:info@puremusic.jp

発行日 2026年4月20日
発行元 NPO 法人 純正律音楽研究会

No.86



青葉を吹き渡る快い風が吹く頃となりました。皆さまお健やかに過ごしのこととお慶び申し上げます。

さて、5月2日(土) 古賀政男音楽博物館 けやきホールに於いて、純正律音楽コンサートを開催いたします。「和と世界を紡ぐ音の万華鏡」と題し、歌・笛・弦が響き合う純正律の世界へと皆さまを誘います。特別ゲストに安田祥子、ゲストに吉澤実を迎え、水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハープ)、吉原佐知子(箏)、大杉光恵(ピアノ)が華やかにステージを彩ります。お誘い合わせのうえ是非ご来場ください。

初代代表 玉木宏樹の意思を引き継ぎ、純正律及び各種の自然音律の豊かな音の世界を広げ、日本の音及び音楽環境を改善して行くために、多くの人々の力を結集して、保健・医療・福祉の増進、社会教育の推進、まちづくりの推進、学術・文化の振興、環境の保全、国際協力、子どもの健全育成等の分野で広く公益に寄与するものとして参ります。今後とも当会をよろしくお願い申し上げます。

ユーミンコンチェルト

武蔵野音楽大学特任教授・洗足学園音楽大学名誉教授
NPO 法人 純正律音楽研究会代表 水野佐知香

当会を立ち上げた玉木宏樹氏が天に召されてから 14 年が過ぎようとしています。長くなってまいりますと、予期せぬことが起こるものです。昨年末は、長期にわたり当会を牽引してくださった相坂政夫氏が突然の病気により退任され、理事として厚いご支援いただいていた椿友幸氏のご逝去されました。相坂氏のご回復、そして椿氏のご冥福をお祈り申し上げます。また、皆さまに毎回お楽しみいただいております齋藤昌男氏のご寄稿は、健康上の理由により残念ながら前号をもって最後となりましたことをお知らせしなくてはなりません。こうやって書き出してみますと、多くの皆さまからの惜しみないご尽力によって当会が成り立っていること改めて痛感し、心より感謝の念に堪えません。

素敵な出会いもありました。私ごとで恐縮ですが、昨年度で洗足学園音楽大学を卒業し、今春から武蔵野音楽大学に週 4 日電車通っています。たまたま隣同士になったご婦人とお話をしたら、お三味線のお家元の先生でいらして、コンサートに足を運んでいただきました。一つひとつの出会い、そしてご縁を大切に、感謝して過ごしてまいりたいと思います。

さて、この 4 月 5 日にミズキーホール開催コンサートに於いて、玉木宏樹作曲「ユーミンコンチェルト」を演奏いたしました。ユーミン（松任谷由美さん）の作品と Vivaldi 作曲「四季」がコラボレーションした楽曲です。聴かれた方はびっくり、前奏タタタタ・タタタタを Vivaldi の四季の一節に置き換え「緑の街に舞い降りて！」が始まる。そして「春よ、来い」そして 2 楽章 Vivaldi の四季の春の 2 楽章ターラターラが始まるとひこうき雲そして海を見ていた午後、3 楽章は、リフレインが叫んでる～あの日に帰りたい～卒業写真で終わります。本当に楽しく、お客さまも感動の渦でした。春だけでなく、春夏秋冬全て演奏してほしい！！とお客さまからも、演奏者からも言われ、楽譜を持っておる方に探してもらうことになっています。ホールの館長さんも満面の笑みで「僕リフレイン好きなんです。嬉しかった♥」とお言葉をいただきました。是非、会員の皆さまにお聴きいただける機会を設けたいと考えており、また、楽譜出版まで漕ぎ着ければと思います。



美しい音程は世界を救うことを伝え発展に努めてまいります。今後とも当会をお願い申し上げます。

(写真は 2026. 4. 5. 「ユーミン・コンチェルト」公演の様子です。撮影：木村敬一)

ムッシュ黒木の純正律講座 第 85 時限目

平均律普及の思想的背景について(74)

純正律音楽研究会名誉会員 黒木朋興

前回、欧米の論理は全てキリスト教の影響下にあるという話をした。現在の西洋民主主義は確かに神中心の社会のあり方を否定し人間中心主義を掲げたが、左を自認し科学主義を奉じる無神論者でさえも、表面的にはキリスト教を否定はしていてもその人物の知の体系はキリスト教に基づいている。そもそも西洋思想とは、キリスト教といった土壌で生まれながらもその果てに神を超克したものだと言えるからだ。

私の知る限り、フランスの芸術家の中でそのようなキリスト教の知の枠組みに捕らわれていない唯一の人がクリスチャン・ヴァンデである。彼は 1948 年生まれ、ドラマー・作曲家であり、マグマというジャズロックバンドを率いて音楽活動をしている。なお、日本ではフランスのプログレッシブロックの代表的バンドとして扱われることが多い。

カール・オルフとの類似性を指摘されることもある独特の楽曲を誇るマグマは日本でも熱狂的なファンがいるが、1998 年に初来日を果たすまで彼らの実像はヴェールに包まれていた。歌詞はフランス語ではなく、クリスチャン・ヴァンデ自身が大学の時に考案したとの噂があるコバイア語という人工言語であり、行きすぎた地球の文明を宇宙人の立場から批判するメッセージが込められているとも言われていた。高校の時初めてマグマの音楽を耳にした私は、その強烈な音楽の向こうにフランスのインテリであるアーティストの姿を想像していた。

1998 年の初来日時にインタビューの通訳を務め、その後、直接会話する機会に恵まれた私は、このクリスチャン・ヴァンデという天才が、フランス社会の中では極めて稀な例外的存在であることを知った。バンドのメンバー中にはインテリや音楽学校での正規の教育を受けているものも少なくない中、クリスチャンは独学で音楽を習得しているのである。彼はまず父親の顔を知らない。ミュージシャンの愛人であった母親の下で育った彼は学校から直接ライブハウスに帰るような少年時代を過ごしたという。そのような環境の中でジャズに目覚めやがてドラムを叩くようになったわけだが、考えてみれば当時のパリはジョン・コルトレーンをはじめアート・ブレーキーなど一流のミュージシャンがライブをやっており、少年クリスチャンは毎日のように世界最高峰の演奏を耳にして育ったことになる。もちろん、彼には類稀なる才能があることは多くのミュージシャンが認めるところではあるが、正規の教育を受けていない彼が多くの名曲をものにできたのはこのような養育環境にあったことを、インタビューを通して知ることができた。

またフランスの高等教育を受けていない彼は、フランスのインテリが仕込まれる論理展開なども習得してはいない。つまりフランスの教育の型に嵌められていないということでもある。故に、フランスの学識者がどうしても抱えてしまうキリスト教文明の痕跡も彼からはほとんど感じられない。

更に、彼はキリスト教のような理性を尊ぶ思想よりも、アニミズムの世界に親和性を感じていることも指摘しておきたい。例えば、『ZESS』という楽曲のコバイア語の歌詞に「サンクトゥス サンクトゥス クリストス クリストス」という音があり、日本人のインタビュアーがこれはキリスト教の影響か？との

問いを投げかけた時、クリスチャンはキリスト教には全く興味がない、アニミズムの世界に惹かれる、と断言していた。

キリスト教の教えでは、神の言葉とはロゴス＝理性と考えられる。対して、アニミズムは理性の域に達していない未発達で劣った信仰の状態として見下されたり、理性では割り切れない人間の感情に訴えかけて人々を扇動するファシズムの道具と見做され批判的に扱われることが多い。その中で、クリスチャンがキリスト教の影響を受けずに自らの世界を構築できたのは、彼が正規の教育のラインから外れていたというのが大きな要因と考えられる。

そのような彼の作った音楽が、エリートのメンバーに支えられ、多くの学識者の支持を得ていることは、フランスという国の一面を反映していると言えるだろう。ただ、クリスチャンは紛れも無い成功者の一人だが、フランスという社会では極めて例外的な存在であることを最後に言っていく。

音律への目覚め

純正律音楽研究会 監事
武内 重親

音楽へ惹かれ始めたのがいつだか覚えていない。子供の頃から音楽が身近にあったことは覚えている。ドレミファというの知らない間に覚えていた。世の中にドレミファというものがあり、それが音階だということもなんとなく知るようになった。

歌を歌ったり、ピアノやギターに触ったりしてそれがクリアになっていったのは中学か高校の頃だった。

そして、第一の難問にぶつかった。

ギターの調弦である。

いくらあわせようとしても6弦合うことがなかった。妥協をしないとギターを弾くところまで辿り着かない。

妥協のはじまりだった。

父がバイオリンを弾いていたので、バイオリンにも興味をもったが、難しそうなのでふれなかった。

60歳を超えた頃、気持ちにゆとりができてバイオリンに触ってみようとケースから取り出してみても困った。バイオリンにはピアノやギターのような音階がない！

それでも見よう見まねで、音階を辿り始めた。

調弦をすると4本の弦がソ、レ、ラ、ミと

なる。レの弦でミをつくり、残りの弦と弾いてみる。ソとミ、ミとラ、ミとミになる。

それぞれ綺麗な音がする。

でも、綺麗な音がするレの弦でつくったミの音出すために押さえた位置が微妙にちがっていることに気づいた。

そして、玉木さんに出会った。

ながーい純正律との旅が始まった。

調律の宿命と、導かれた響き

純正律音楽研究会 理事
三宅 美子

ハープという楽器は、常に「調律」という果てしない葛藤を抱えています。張り詰めた弦の長さをメカニックによって変化させるという複雑な構造ゆえの困難は、なかなか他者に理解されるものではありません。しかし、そのジレンマの中で試行錯誤を繰り返してきたからこそ、私は純正律という真実の響きに出会えたのだと感じています。

調性ごとに一音一音、実験的にチューニングを重ねてきたこの十数年。それは、音楽家としての私の確かな宝物となりました。この歩みを支えてくださったのは、故・玉木宏樹さんとの稀有な巡り合わせであり、そして俳句の世界へと導いてくださった奥様との縁です。今や「銀座俳句」への投句は、私の日常に欠かせない静かな祈りのような時間となりました。

言葉を綴り、音を紡ぐ。その重なりの中にこそ、私が追い求める「純粹な響き」の輪郭があるように思います。これまでの月日に感謝を捧げつつ、五月の演奏会では、その結晶とも言える音色を皆様の心にお届けしたいと願っております。

玉木宏樹先生と三人官女

純正律音楽研究会 理事
吉原 佐知子

会員のみなさまこんにちは。このたび、初めて会報に原稿を、とのお話しをいただきました、箏の吉原佐知子です。いつも純正律コンサートにお運びくださり、ありがとうございます。

そもそも、私がこの純正律音楽研究会と関わったきっかけは、私の音楽の師である、邦楽の先生が、純正律音楽研究会を立ち上げた玉木宏樹先生と親交が

あり、三味線のさわりはまさに純正律そのものであり、箏も柱を動かして調弦するので純正律音楽にぴったりだ！とのことから、玉木先生に邦楽作品をたくさん書いていただき、私の所属していた「現代邦楽研究所」のメンバーで演奏し、たくさんの玉木先生の邦楽作品が生まれ、それらは今や日本中の邦楽愛好家に親しまれる曲となっています。

そんなわけで玉木先生の曲を演奏するたびにたくさんリハーサルやコンサート（そのあとの打ち上げも）をご一緒させていただく機会が多々あり、玉木先生と同じく私もお酒好きなもので、先生が大変可愛がってくださり、玉木先生のヴァイオリンと私の箏、二人で純正律のCDを制作したり、純正律コンサートや都電コンサートをさせていただくようになりました。

2010年に開催いたしました、私の上野の旧奏楽堂での初リサイタルでは、箏のソロ「オンディーヌの眼覚め」を書いてくださり、アンコールでは、玉木先生は舞台上がってヴァイオリンで「春の海」の伴奏をしてくださりました。

またその日のために、ヴァイオリンと箏のCD「波間のきらめき」を一緒に作り、当時の純正律音楽研究会事務局の相坂さんがロビーで販売してくださり、純正律音楽研究会には、とんでもなくお世話になったのでした。ちなみに、2枚目のアルバム「箏とヴァイオリンによる日本のメロディ」もつくりました。

その後、現代邦楽研究所が洗足学園音楽大学に移管し、洗足学園音楽大学が現代邦楽研究所を講師ごとまるっと引き受けてくださり、同時に学部、大学院に「現代邦楽コース」ができました。

そして私は時を経て、昨年より洗足学園音楽大学現代邦楽コースの統括となり、今年度からどういうわけが現代邦楽研究所の所長を拝命されたのです。（ちなみに、このたび純正律音楽研究会の理事にもなるようです。）

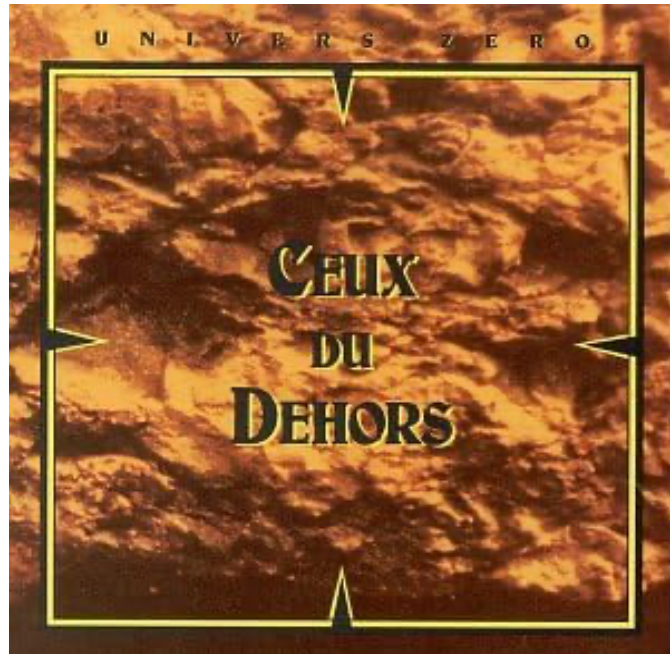
話はもどって、玉木先生の晩年頃は、偶然にも洗足学園音楽大学には、これまた玉木宏樹先生と親交の深い水野佐知香先生が教授をされており、玉木先生が亡くなってから、水野佐知香先生が純正律音楽研究会の代表となりました。

そして、また別のところでは、ハープの三宅美子先生も玉木先生と活動されていたので、玉木先生とご縁のある三人が玉木先生のお葬式で意気投合？し、いまや三人官女（と勝手に命名）として、純正律音楽研究会でCDを作ったりコンサートを開催し、玉木宏樹作品や純正律音楽の素晴らしさを発信するために活動しています。

今思えば、玉木先生が結び繋げてくださったご縁ダナ〜と感謝しかありません。玉木先生、ありがとうございます♪

皆様、今後とも純正律音楽研究会をどうぞよろしく願い申し上げます。コンサートなどでお会い出来るのを楽しみにしております。

CD レビュー 純正茶寮
Univers Zéro
『Ceux De Dehors』
純正律音楽研究会名誉会員 黒木朋興



Univers Zéro
『Ceux De Dehors』
メーカー : Cuneiform
EAN : 0045775003924
レーベル : Cuneiform
ASIN : B000008T05

ベルギーのロックバンドの雄、Univers Zéro が 1981 年に発表した 3 枚目のアルバム。日本ではチェンバーロックとか暗黒室内楽団して紹介されることが多い。CD 店ではプログレッシブロックのコーナーに置かれ、特に RIO 系として分類されている。

RIO とは Rock in Opposition の略で、イギリスの Henry Cow を中心に大手レーベルに支配されている音楽市場のあり方に疑問を持ち、自分たちでレーベルを立ち上げフェスティバルを開催し、大手資本が経営するレコード会社の手を借りずに音楽活動を展開しようとした運動で、今でいうインディペンデントレーベルのはしりになる。

高校 2 年生の時にこのアルバムを聴き、その前衛的なロックのあり方に心を奪われた。このバンドの特徴は、ドラム、ベースとピアノによるリズム隊の上

に、バスーン、オーボエやクラリネットなどの木管楽器、ヴァイオリンやヴィオラなどの擦弦楽器という楽器でリードを奏でている点である。

畳み掛けるような変拍子もさることながら、それまでロックファンとしてほぼエレキ楽器しか聴いてこなかった私は、このアルバムでいわゆるクラシック楽器の響きの美しさの虜になった。特に、バスーンの低音に魅了された。

エレキ楽器と違って、クラシック楽器は厳密な意味において平均律ではない。木管楽器は繊細で音程を保つのに苦労がある。私が平均律以外の音程に惹かれていったきっかけの一つになったアルバムである。

一曲目、Dense は紛れもなくロック史上に残る名曲である。

【販売 CD ご案内】

玉木宏樹のミネラル・サウンド

光の国へ 歓喜の翼



収録曲

1. 歓喜の翼
2. ドーン・オブ・ザ・フォレスト
3. ワンネス
4. キリエ
5. キリエ II
6. プロムナード・求光
7. マザーズ・ボイス
8. ナスカへの道
9. ケルト幻影
10. 月夜に踊る
11. 燦
12. 清流・木霊
13. 眠りの苑

ミネラル・ミュージック・シリーズはここから始まる・・・純正律による濁りがなく 豊富な倍音を含むハーモニーはまさに天国的。ヒーリング効果の報告も続々と寄せられる「光の国へ」シリーズをリニューアルした新シリーズ。耳に、体に優しいフルカラーの音色をどうぞ。(Amazon Music より引用)。

販売価格 一般：税込 2,200 円 会員：税込 1,760 円

右掲載 QR コードよりご視聴いただけます。注文フォームも掲載していますので、便利にご購入いただけます。



【思い出写真館】

写真は2011年4月18日のものです。向かって右が玉木宏樹先生、左は当会監事の武内重親氏です。写真について、武内氏より当時の様子を混じえてお話を伺いました。



玉木さんは弟子を取らなかったそうで、著名な外国の女性バイオリニストと私だけだそうです。革命的(写真掲載の教本)の最後の確認で生徒のパートを試すために始めたばかりで下手な人が必要だったことから私が試奏することになりました。

元々、純正律について話を聞くために毎週水曜日の午後3時過ぎに西麻布の事務所に通い始めていた頃で一仕事終わって飲むのが目的だった記憶があります。

とにかく、底抜けに飲むので、話したことを忘れてしまうため、ひよっとすると毎回同じ話をしていたかも知れませんでした。



武内さま、貴重なお話をお聞かせくださりありがとうございました！

ペットコンサートを行なったことも！ワンちゃんたちを前にしてヴァイオリニストの玉木宏樹氏が演奏するという、大変豪華で贅沢なコンサートでした。気持ち良さそうに聴いていて演奏が終わると「ワンッ！」とワンちゃんたちからブラボーの声援が送られたそうです。



【NPO 法人純正律音楽研究会 設立趣旨書】

現代の社会をとりまく環境問題は年々その深刻さを増しています。その中で意外に見過ごされていますが、日本における音及び音楽を取り巻く状況は欧米に比べ後進的で悲惨な状態です。このままでは日本は音や音楽の面から危機的な状況に陥ってしまいます。

家庭にあつてはテレビやラジオ、街でもからくり時計やスピーカーから流される無神経な音や音楽の数々。行楽地や自然公園にまで至る無意味な垂れ流し音楽は、およそ平均律という非常に騒がしい人工的な音律で作られており、自然の摂理の協和的響きを無視しています。音楽を使うのなら、もっと人間にやさしい、ハーモニーのきれいな純正な自然音律を意識した音及び音楽づくりをしてほしいと願うものです。

ここに純正律音楽研究会は人間の体にもシンクロする純正律の効用を再発見し、純正律を始めとする各種の自然音律による美しい音空間づくりを社会に提唱するために、社会的存在として広く音楽家や音楽愛好家との協同の活動を展開すべく、特定非営利活動法人純正律音楽研究会として新出発するものです。純正律はヨーロッパで発達した荘厳な教会音楽のような美しいハーモニーの基礎となる音律です。端的には主和音がぴったり調和する音階のことをいい、具体的にはポピュラー系ではエンヤやアディエマス、クラシック系ではヒリヤードアンサンブル、リベラ、ウィーン少年合唱団や近年注目の古楽器アンサンブルの演奏が純正律です。

任意団体としての純正律音楽研究会の活動も4年経ち、徐々に「純正律」という言葉も音楽愛好者の間では定着してきました。今日までリリースした純正律オリジナルCDは、各方面で安らぎをもたらす音楽として好評を博しております。純正律による街の環境音楽も話題になりつつあります。音楽療法的な見地からしても、純正律及び自然音律を意識した音楽づくりは貢献できる可能性を大いに秘めていると思われます。

純正律及び各種の自然音律の豊かな音の世界を広げ、日本の音及び音楽環境を改善して行くために、多くの人々の力を結集して、保健・医療・福祉の増進、社会教育の推進、まちづくりの推進、学術・文化の振興、環境の保全、国際協力、子どもの健全育成等の分野で広く公益に寄与するものとして参ります。

平成 15 年 5 月 13 日 玉木宏樹



純正律音楽研究会のロゴマークです。
玉木先生のパソコンに作成過程が保存されていました。

玉木宏樹（作曲家、指揮者、ヴァイオリン演奏家）

兵庫県神戸市に生まれ、6歳まで山の上の禅寺、その後は兵庫県武庫郡鳴尾村（現・西宮市）、小3から高校までは神戸市兵庫区石井町三丁目に住んだ。神戸市立平野小学校、神戸市立湊中学校（現・神戸市立湊翔楠中学校）卒業。中学時代は阪急今津線で甲東園のバイオリンの古武滋野のもとへ通っていた。1965年、東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。在学中から東京交響楽団に所属して演奏家としての活動を開始。また、大学の先輩である山本直純に作曲と指揮を学んだ。卒業後、楽団「アルキカルテット」を主宰。革新的な演奏で注目を浴びたが、同時に批判的な意見も少なくなかった。この頃から山本直純の事務所にも所属して映像作品の音楽を手伝うようになる。当時は山本の名義で玉木が作曲や編曲に携わることもあった。『男はつらいよ』主題歌は山本一人の名義だが、実際は山本が作った曲に玉木がイントロ、伴奏を付けたという。元来は純正律を採り入れた作曲方法を用いていたが、この頃から「商業としての音楽」も意識するようになり、1968年に『アニマル1』で初めて本人の名前が表に出るようになった。晩年も著書やCDを通じて純正律の普及に努めていた。「しゃべるヴァイオリン」（ヴァイオリンの音色が人語を発しているかのように聞こえる奏法）などの冗談音楽でも知られる。2012年1月8日68歳没。



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せください。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号以降の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〈ご挨拶〉

この度、前任 相坂政夫氏より事務局業務を引き継ぎました 大塚さくら と申します。皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます。

〒106-0032 東京都港区六本木 3-16-13-1009

Tel:03-5427-9034

Fax:050-3737-8267

E-mail:info@puremusic.jp

事務局担当 大塚さくら

2026年4月20日：NPO法人 純正律音楽研究会

*純正律音楽研究会 HP が新しくなりました！下記QRコードよりご覧いただけます。



N P O 法人 純正律音楽研究会
since 2003